

解剖学2

(1) 教室の沿革について

解剖学(2)講座は、昭和56年4月に高橋 暁が初代教授として就任し発足した。続いて田中輝男が助教授として、岡留敏秀、狩山博文、川勝樹夫が助手として着任した。助手の三人は、翌年3月までに臨床医学へと転じた。田中は、昭和63年9月に九州大学歯学部口腔解剖学第一講座教授として転任した。その後を受け、平成元年4月に鳥越甲順が助教授として着任した。平成3年4月から平成8年9月まで、田中博人が研究員として在籍した。平成8年1月から4月まで、鳥越は文部省在外研究員および客員教授としてルンド大学へ外国出張した。平成9年3月、高橋が定年退官し、平成10年2月に佐藤 真が教授として赴任した。同年4月に助手として永野 隆が転入し、八木秀司が着任した。平成10年4月より平成11年3月まで今野大治郎が、大学院特別研究学生として在籍した。佐藤の着任時にはスタッフは鳥越助教授一人のみであり、新たな人員用に実験機や机を補充することが最初の仕事であった。一方、実験室には分子生物学用の物品は全くなく、ピペットマンやpHメーターなどの物品の購入から始めねばならなかった。しかしながら、大学当局、事務局及び他科の御厚意と、永野、八木両助手や今野君、鳥越助教授、藤森三苗事務官の大変な努力・協力があり、比較的短期間で実験を開始することができた。その後、柳町(現、加藤)ともこが技術補佐員として、平成11年4月からは高村佳弘(眼科学)、久保田力(整形外科学)が大学院生として当教室にて研究を続けている。さらに、平成11年11月より霊河秀樹技術専門職員が当教室に配置替えとなった。上記の人々に加え、石井、倉田、上村の学生諸君が時間を見つけ、教室にて実験を行っている。熱気があり、凜として、しかし多くの人の集まる楽しい雰囲気教室作りに今後とも努めたいと考えている。

(2) 研究体制の変遷と現状

高橋は感覚器の微細構造や動脈における自律神経支配に取り組んだ。田中は唾液腺由来のペプチドや硬組織の成長について研究を進めた。鳥越は新たに開発し

たフィルムモデル法を使って末梢神経の再生、特に再生初期のシュワン細胞の動態についての研究や、剪定現象の実証、重複傷害効果の成因、新規に合成したMS-818の再生神経に対する伸長促進作用、神経中毒物質アクリルアミドの再生神経に及ぼす影響について研究を続けている。佐藤、永野、八木らは形態学と分子生物学、細胞生物学を基本のツールとして、脳の謎や疾病の仕組みの解明と傷害脳の再生を行うこと目指しており、(1)脳神経系の発生・発達に関する因子の探索と、その因子を通じて発生・発達・再生機構を分子レベルで解明する(2)疾病と発生に関連する因子を検索し、それら分子の機能及び病態への関与の仕組みを解析する、という2つをテーマとし研究を進めている。現在までに、佐藤らは神経細胞の移動に関係する因子としてFILIPを、神経細胞の分化・再生に関係する因子としてneurepinを、発生と疾病に関連する因子としてTBPIPを、それぞれ新たに発見・クローニングし、その解析を進めている。

(3) 教育体制の変遷と現状

高橋教授の時代には骨学、組織学と神経解剖学を担当した。鳥越は神経解剖学および組織学の講義と顕微鏡実習を既習後、まとめとして神経解剖学成果発表会を平成2年度から9年度まで、組織学展覧会を平成7年度から9年度まで実施した。特に、神経解剖学成果発表会には、毎回他学年の学生約200名、基礎医学および臨床医学関連の先生方約30名が参加した。平成10年度以降は佐藤の着任に伴い教育内容・方針も大きく変わった。現在はマクロ解剖学(頭頸部)、神経解剖学、組織学を担当している。実習を通じて基本的な事項を学生にマスターさせることを主眼とし、同時に臨床系教官の応援を積極的に求め、臨床医学を視点に入れた解剖学教育の実施を心がけている。解剖学(2)では主に頭頸部や神経系を扱うため、耳鼻科、眼科、神経内科、脳外科、高エネルギーセンター(講義順)の臨床各科の協力も得て教育を行っている。又、従来の講義の長所である学生の自主性を重んじる方針は堅持し、例えば組織学では、学生に講義を担当させる試みも積極的に行っている。さらに、授業の最後には学内外の最新の研究を紹介し、研究への関心を喚起するべく努めている。

(文責：佐藤 真，鳥越甲順)